

特集にあたって

三浦 英俊 (明海大学)

毎年春と秋に開催される研究発表会に参加する目的は？と問われたとき、思い浮かべる答えは人によりまさに千差万別であろう。たくさんの研究発表を聞いて新しい知識を入手しようとする人がある。その一方で、久しぶりに知り合いと会って夜はうまい酒を飲もうと思っている人がある。実際にはその両方を目的に参加する人が多いであろうし、かと思えば開催当時は最近行ったことがないから参加、という人がいてもおかしくない。近年は企業事例交流会が盛況であり、国際セッションでは海外の研究者と交流することもできる。見学会や特別講演を楽しみにしておられる方も多いと思う。

研究発表会は来秋にちょうど100回に達する。本特集は「研究発表会から見たOR研究動向」と称して、半世紀の研究の変遷をたどることを試みた。昭和32年第1回研究発表会のアブストラクト集によれば一般発表件数は23であった。今秋神戸学院大学で開催された98回目の研究発表会では141件をかぞえ、七つの会場に分かれたパラレル・セッションで進行された。この間にずいぶん変わってしまったことの方が多いであろうが、逆に変化していないことはあるのだろうか？という素朴な疑問から、研究発表会から半世紀の日本のOR研究がどのように発展してきたのか調べてみたい、というまことに個人的な動機でこの特集を企画したところ、編集委員会で比較的あっさり承認をもらうことができた。研究発表会参加の目的が多様多様であるように、おなじ切り口でもその見方・解釈・感想も様々であろう。本特集の目的は、読者の皆さんに研究発表会を俎上にのせて切ってみせるので、その様子を楽しんでいただきたい、ということである。学会事務局に学生を連れて資料を閲覧させていただき、全体の流れが分かるデータを中心に集計し簡単な

分析を行った。ほぼすべてのアブストラクト集を閲覧し、セッションにテーマ名が付けられた1977年以降のセッションテーマ名のデータを中心に紹介する。集計してあらためて理論から応用までOR研究の間口が広いことに驚いた。当然ながら小生一人ではこの間口を調べ上げることは不可能であるので、3人の先生に執筆を依頼した。神戸学院大学の三道弘明先生には、数理計画と並んで発表件数が最も多いグループに属する信頼性について書いていただいた。慶應義塾大学の枇々木規雄先生には、最近十年余りで急速に発表件数を増やしている金融分野の発表について分析をお願いした。小樽商科大学の天津晶先生には、研究発表会における学生の発表についてデータ分析をしていただいた。いずれも執筆された先生方ご自身と研究発表会の関わりにとどまらず、幅広く分析研究した成果を書いて下さった。

研究発表会はOR学会の“ひな形”であると思う。このひな形は巨大かつ複雑ゆえに、切り方によって見えるものもずいぶん異なることであろう。この企画では研究動向という切り口で眺めてみたが、枇々木先生が金融工学分野で活躍されている研究者について言及されているように、日本のOR研究を構築し支えてきた“人”に焦点をあてて振り返ることも興味深いと思う。ほぼ毎月連載されている今野浩先生の連載を読んで、OR研究が社会で認められるためには、偉大な理論やモデルあるいは広い応用といったことだけではなく、活躍する“人”が重要であるという感想を持った。人をテーマにOR学会を概観することは、小生ではその役目を果たすことは難しいと思うが今後も勉強していきたいと考えている。

最後になりましたが、この企画の着想と助言を下さった筑波大学の太澤義明先生にお礼申し上げます。